菩薩。忝く正直の者の頭にやどらんと誓はせ給ふに合せて

ありきつゝきつゝ見れどもいさきよき人の心をわれ忘れめや

とよませ給へるたのもしさよ。かゝれば二世の望を遂げんこと。直しき心にはしくべからず。(十訓抄)

○誡　其四

つれ〴〵わぶる人は。いかなる心ならん。まぎるゝ方なく。たゞ一人あるのみこそよけれ。世に隨へば心外の塵にうばゝれて惑ひ易く。人に交ればことばよそのきゝに隨ひてさながら心にあらず。人に戲れ物にあらそひ。一度はうらみ一度はよろこぶ。そのこと定れることなし。分別妄に起りて得失やむときなし。まどひの上に醉へり。醉の中に夢をなす。走りていそがはしく。惚れて忘れたること。人皆かくのごとし。いまだまことの道を知らずとも。緣を離れて身をしづかにし。事に與らずして心を安くせんこそ。暫く樂ぶともいひつべけれ。生活。人事。伎能。學問等の諸緣をやめよとこそ。摩訶止觀にもはべれ。(徒然草)

○誡　其五

筆をとればものかゝれ。樂器をとれば音をたてんとおもふ。盃をとれば酒をおもひ。賽をとれば攤うたんことをおもふ。心はかならず事に觸れてきたる。假にも不善のたはふれをなすべからず。あからさまに聖敎の一句を見れば。何となく前後の文も見ゆ。卒爾にして多年の非を改むることもあり。假に今この文をひろげざらましかば。この事を知らんや。これすなはちふるゝ所の益なり。心さらにおこらずとも。佛前にありて。珠數をとり經をとらば。怠るうちにも善業おのづから修せられ。散亂の心ながらも繩床に座せば。おぼえずして禪定なるべし。事理もとより二つならず。外相もしそむかざれば。內証かならず熟す。強ひて不信といふべからず。あふぎてこれをたふとむべし。(徒然草)

○誡　其六

望月のまどかなることは。しばらくも住せず。やがてかけぬ。心とゞめぬ人は。一夜の中にさまでかはるさまも見えぬにやあらん。病のおもるも。住する隙なくして死期すでに近し。されどもいまだ病急ならず。死に赴かざるほどは。常住平生の念にならひて。生の中におほくの事を成じて後。しづかに道を修せんと思ふほどに。病をうけて死門に望むとき。所願一事も成ぜず。いふかひなくて年月の懈怠を悔いて。この度もしたちなほりて命またくせば。夜を日につぎてこの事かの事怠らず成じてんと。願をおこすらめど。やがておもりぬれば。我にもあらずとり亂してはてぬ。このたぐひのみこそあらめ。この事まづ人々急ぎ心におくべし。所願を成じてのち。いとまありて道にむかはんとせば。所願つくべからず。如幻の生の中に何事をかなさん。すべて所願皆妄想なり。所願心にきたらば。妄心迷亂すと知りて。一事をもなすべからず。直に萬事を放下して道に向ふときは。さはりなく所作なくて。心身ながくしづかなり。（徒然草）

◎誡　其七

老きたりて。始めて道を行ぜんと待つことなかれ。ふるき墳おほくはこれ少年の人なり。はからざるに病をうけて。忽ちにこの世を去らんとする時にこそ。はじめて過ぎぬる方のあやまれることは知らるなれ。あやまりといふは他の事にあらず。速にすべき事をゆるくし。ゆるくすべき事を急ぎて。過にしことのくやしきなり。その時悔ゆともかひあらんや。人はたゞ無常の身にせまりぬる事を。心に必至とかけて。つかのまも忘るまじきなり。さらばなどかこの世の濁もうすく。佛道を勤むる心もまめやかならざらん。昔ありけるひじりは。人のきたりて自他の要事をいふときは。答へていはく。今火急の事ありて。既に朝夕にせまれりとて。耳をふたぎ念佛して。終に往生を遂げたりと。禪林の十因にはべり。心戒といひけるひじりは。あまりにこの世のかりそめなることを思ひて。しつかについゐけることだになく。常はうつくまりてのみぞありける。（徒然

草）

○誠　其八

法然上人の御をしへには。七惡五逆も往生すと信じて。すこしの罪をも犯さじと思へ。重罪なほ生る。いはんや小罪をやとの給へり。十惡五逆も往生すと信せよといふは。にくみながらすて給はぬ御心を知るなり。すこしの罪をも犯さじと思へといふは。すてねどもにくみ給ふ事を。つゝしまんためなり。惡くみながらすて給はずとしりぬれば。重罪なりとも生れん事疑ひなし。すてねども惡くみ給ふぞかしと知りて。つみをおそる時は。いはんや小罪をやと。いよ〱たのもしげにも惡くみすて給はゞ。超世の悲願かひなかるべし。我ら何をか頼みとせん。捨て給はねばとてつゝしまずは。餘りにあやにくなる心なり。かゝらんひが〱しさをば。佛も反りてうとみ給ふべき。さればとて。つみを盡くやめてこそといはんも。又風情すぎたり。なにとしても。五濁の凡夫のくせなれば四儀の作罪とゞまるべきにあらず。縱へわづかに清き心を起せども。水に畫く如し。貪瞋の波漲り來りて。暫くもやむ事なし。既に煩惱の源をたゝず。いかでか罪業の流れをやめん。たゞわろしと知り。あさましと思ふ心ばせまでを申にこそあれ。念じかねて過まりたらんをりは。それぞかし。たすけ給へ南無阿彌陀佛と。思ふへかめるも。かゝるを隨犯隨懺の念佛とはいふなり。罪垢盡く消えて身常に清淨ならん。臨終の時。罪人惡人の名を改めて。來迎の佛善男善女とほめ給ふへし。（三部鈔）

○法皇の灌頂（後白河法皇）

法皇は三井寺の公顯僧正を御師範として。眞言の秘法傳受せさせ給けるが。今年の春三部の秘經を受させ給ひ。二月十九日。三井寺にて御灌頂有べき由思召立と聞えし程に。山門の大衆憤申けるへ。昔よりして今に至るまで。御灌頂御受戒。みな我山にして遂させ給へり。山王の化導。專受戒灌頂の爲め也。就中園城寺は昔天智天皇の御子。大友王子。國家を亂ら

んとて。軍を起し給し。謀叛惡逆の境也。始て今御入寺有て御灌頂あらん事旁以て不可然と申ければ。樣々誘へ仰せけれ共。例の山大衆更に院宣を用ひず。三井寺にして。御灌頂有らば。彼寺を可燒拂之由。僉議すと聞えければ。權大納言隆季卿の奉書にて院宣を被下て云く。御入壇。偏に可爲秘密結緣之處。還て及騷動の條。不慮の次第歟。因茲園城寺御幸所延引也。是延暦園城安全の謀也と有けれ共。大衆猶憤申けるは。延引の院宣全く山門の眉を開かず。永く三井の御幸を不被停止。彼寺に發向して。佛閣僧坊一宇も殘さず。可燒拂之由騷動すと聞えければ。重て院宣を被下て云。御幸の事被停止の由。一日被仰下畢。

抑も三部經と申は。大日經金剛頂經蘇悉地經是也。今此經の大意を尋ぬれば。若有人此經。受持讀誦者。卽身成佛故。放大光明圓。と說き。又若有人受持讀誦此經典者。父母所生身忽成大日如來。放胸間大光明。照六道三有黑闇とも說ける秘典也。後白川法皇忝も觀行五品の位に御心を係け御座して。法花修行の道場に五種法師の燈を挑げて。七萬八千餘部轉讀。上古にも未承及。況や於末代乎。十善玉躰の御膚。三密護摩の烟に蒼て。卽身菩提の聖帝とぞ見させ給ける。彼公顯僧正と申は。法皇の御外戚。顯密兩門の師德也。止觀玄文の窓の前には。一乘圓融の玉を磨き。三密瑜伽の寶瓶には。東大山門の花開け給へり。內に付外に付て。御歸依の御志深によりて。此妙典をも公顯僧正に受。御灌頂をも三井寺にてと思食たりけるに。山門騷動して打止め奉ければ。御心うしと被思召けり。法皇我朝は是邊土粟散國也。何事も爭か大國に等しかるべきなれども。中にも雲泥不及けるは。律の法文僧の振舞にてぞ有らん。僧衆の法は歸僧息諍論。同入和合海。といへり。縱和合海にこそ入ざらめ。諍論を專にして。させる咎もなき三井寺を。燒失せんとする條。無道心の者共かな。破和合僧は五逆罪の隨一に非すや。形ばかりは出家にして心はなほ在俗よりも不當也。愚癡のやみ深して。憍慢の幢高し。比丘の形と成ながら。難値如來の敎法をも

修行せず。大日覺王の智水の流に身をも不洗。朕が適入壇灌頂せんとするを。障碍する事の無慙さよ。縱朕が理を枉て非法を宣旨し。若は山門の所領を別院に寄すとも王威王威たらば。誰か背き申べき。何に況んや受戒灌頂と云は上求菩提下化衆生の秘要也。智德明匠讚嘆し。貴賤男女も隨喜せり。たとへ隨喜讚嘆褒美するまでこそなからめ。無上福田の衣の上に。邪見放逸の冑を著。定惠二手の掌の內に。佛法破滅の續松を捧けて。三井寺を燒き亡さんと計ふらん條。少しもたがはず提婆達多が類にこそ。さこそ末代といはんからに。此れ程に王威を輕すべき樣やは有べき。口惜事哉とて。宸襟しづかならず。逆鱗しば〳〵忝し。

さても法皇へ公顯僧正を被召具て。天王寺へ御幸あり。彼寺の西門にして。御手を合せつゝ。御心中に住吉明神を拜ませ給ひつゝ。

住吉の松吹風に雲晴て龜井の水にやどる月影

とあそばして。五智光院にして。龜井の水を結ひ上げ。五瓶の智水として。

佛法最初の靈地にてぞ。傳法灌頂をば遂させ給ける。法皇今年六十一。智證大師より十五代の御付法也。無上菩提の御願。忽に成就して。有待不定の玉體。速に金剛佛子に列り御座す。六大無礙の春の花は出自胎藏界理門。三密瑜伽の鏡の面へ浮五智圓滿。聖體。八葉肉壇の胸の間には。耀三十七尊。光圓。五輪成身の寶冠には。嚴八十種好。金花遍照遮那の悟り開けて。密嚴花藏の土に遊び給ふも。あな目出たし。(源平盛衰記)

○中將の出家(平維盛高野山中に出家す)

夫より檜原杉原百八十町分け過きて。奧院に參り給。大師の御廟を拜ミ給へは。瓦に松生ひて垣に蘿はへり。庭に苔深うして軒にしのぶ茂りたり。是や此仁明天皇の御宇。承和二年三月二十一日の寅の一點に。入定し給へる石室ならんと。過にし方を數へければ。三百餘歲に越にけり。三位中將は御廟の前に良久く念誦して。又もと思ふ參詣も心に任せぬ我身也。遠うして又遙か也。維盛進んでは。釋迦の出世にあはず。退いては

慈氏の下生難期。恨らくは其中間に留つて。空く三途に歸らん事を。今暮雲のこゝろ難繫。既に朝露の命消なんとす。願くは妄執を廟松の風に拂て。永煩惱を法水の波に洗ひ。三界の火宅を出てゝ。無苦の寶刹に生れんとぞ被奉拜ける。さても維盛か身は。雪山の鳥の今日不知死と啼らん樣に。今日か明日歟と思ふ者をと宣ひて。左右の袖を顏にあて。雨々と泣給へは。阿淨も重景も共に袂を絞りけり。其後時頼入道か庵室に歸り。持佛堂にさし入て。拜廻し給へは。本尊かた〳〵に奉安置。閼伽をしな〳〵奉備有樣。淨名居士の方丈に。三萬二千の床を立て。三世十方の諸佛を崇め奉たりけんも。角やと覺えて最貴とし。行儀の作法を見給ふにも。昔は世俗奉公の袖を搔をさめしに。至極甚深の床の上には。心地の玉を瑩くらんと覺えたり。後夜晨朝の鐘の聲には。生死の睡を覺すらんと聞えけり。其夜は來方向末の物語して。互に泣より外の事なし。夜も既に明にければ。三位中將時頼入道に仰けるは。故郷に留置し少者共の。さしもわりなかりしをも。其母か强ちに慕ふをも。今一度見もし。みえはやとこそ思ひて。屋島をば忍び出しか共。そも今は叶はす。さらは出家して熊野へ參らばやと思ふ也と語り給へは。入道淚ぐみて。此世は夢幻の所。憂事も悲き事も。始て驚き思召べきに非ず。都に留め置せ給。公達北方の御事。尤思召切せ給ふべし。分段輪廻の境に生れたる者。誰か死滅の恨をまぬかれたる。妄想如幻の家に會ふ輩。終に別離の悲みあり。彼沙羅林の春の空を尋れば。萬德の花萎て。一化の緣永く盡ぬ。歡喜園の秋の風を聞けは。五衰の露消て。巨億の樂み早く空し。況んや下界泡末の質に於てをや。不定短命の州に於てをや。依之老たるも去り若きも去て。大小の前後定めなし。貴きも逝賤も逝て。上下の昇沈難知三界二十五有の栖。何者歟此苦を脫れん。五蟲千八百の類爭か其愁を離るべき。可厭は憂世也。可悲は此身也。君御一門の餘執に引れて。西海の旅に趣き給へる上は。敵の爲に捕はれ御座歟。水底に沈み給へきか。大師入定の靈地也。兩部結戒の道場也。此峯に

して忽に俗服を脱き。法衣を著し御座さん事。卽身に安養の淨刹に詣し。給へりと思召作へし。

三位の中將涙を流し。打頷許給て。誠に都を出し日より敵の爲に亡されて。骸を山野の道の邊りに瀑て。名を西海の波の底に沈むべしとこそ思しに。懸べしとは懸ても思寄ざりき。是も前業の催す處と云ひながら。如何にも故郷の少者共の事のみ思出づれ共。其事思棄てゝ參詣せし程に。粉河にて法然上人に對面して。念佛往生の法門を聽聞し。大乘無作の大戒を授けられ。剩へ上乘瑜伽の靈峯に登り。大師草創の佛閣を拜み。堂堂巡禮して。六道輪廻の業を滅すらんと存する上。加樣に目出たく貴き事共承はれば。昔は家門主從の禮儀たりしか共。今は菩提の大善知識とこそ思召せ。さらば急き出家をと宣ふを見奉に。潮風に黑み。盡せぬ御襟に痩せ衰へ給ひて。其人共見ねず成給ひたれ共。猶人には勝りて紛ふべくもなし。らうたくうつくしくぞ御座ける。如何なる讎敵成共哀と思ぬへし。御戒の師には。東禪院に理覺坊の心蓮上人と申僧を請じ奉る。時賴入道は。本尊の御前に香を燒き。花を供じ儲けたり。三位中將は髮を左右に結び分て。四恩師僧を拜し給ふ。心蓮上人髮剃を取り。泣々御後に立寄つゝ。流轉三界中。恩愛不能斷。棄恩入無爲。眞實報恩者と。三返唱へて剃り給けるにも。北方に今一度かはらぬ貌を見せて。角もならば思事なからましとれぼすぞ。愛執煩惱罪深しと云ながら。誠にと覺えて糸惜き。奉御髮剃落けれハ。御衣を召替て。心蓮上人。大哉解脱服。無相福田衣。被服如戒行。廣度諸衆生と唱て奉授御袈裟。法名戒法房とぞ申ける。（源平盛衰記）

○臨終の覺悟（鬼界島俊寬僧都の臨終）

月日の重なるに隨て。いとゞ憑なく見えけるが。當年の正月十日比より打臥給ひぬ。有王は今は最後と思て立離す。看病して兼て賢くも善知識して申けるハ。再ひ都へ歸り上り給はざる事。努々御妄念に思召すべか

らず北方も若君も空き露と消させ給ぬ姫君は奈良に御座せば御心安かるべし唯娑婆の定なき有様を思ひ知り給ふべし假令妻子を跡枕に居置奉り古き都にして終り給ども住馴し境界は御名殘惜思召すべし依之衆生無始より生死にめぐりて三界を不出とこそ承り候へ富貴榮花も終には衰ふ御身に宛て知ぬべし長命と云共必ず死す昔より形を殘す者なしされば今は一筋に今生を穢土の終と思召切て當來には必ず淨土へ參らんと心強く願ひ御座べし無益の妄念を殘して心憂き境に廻り給ふべからず四五箇年の流罪猶以難忍無量億劫の惡趣出期を不知といへり今度厭ひ給はずといつをか期し給べきなど種々敎訓申ければ僧都息の下に二人は被召還俊寛一人留めし上は思切てこそ有しか共凡夫の習なれば折々には去り共と憑む心も在りき其云甲斐なし巳角理を以て云ひ敎ふれば思ひ切りぬ昔は召し仕ひし所從今は可然善知識也權化の善巧歟大聖の方便歟誠に此世の中の習強に都へ歸

りても何にかはせん玉の簾錦の帳も萬歲の粧にあらず尤も可厭金臺銀階千秋の粧にあらざれは無由其上不待入息出息身なれば朝露の日に向ふよりも危し生死不定の命なれば蜉蝣の夕べを待よりも短し殊に此二三年は歎を以て月日を運ひ齡傾き勢衰へて悲みを以て星霜を送りつ危壽に病付ぬ浮雲の假の宿とは知りながら墓無く我身を起して歸洛を待ちき草露の英なる命と思ひながら愚に常見を成して怨念を含み終には是山川の土なれども捨て難きは血肉の身也思へば又野外の土なれども惜まんと欲するは分段の膚也碧綠紺青の髮筋も遂には塚際の芝に纒荘嚴端直柔和の姿も赤路邊の骸骨也尤も可厭爭か悲さらん蘭香の家も未た無常の悲みを免れず櫻梅の宿も猶生死の別には迷へり況んや俊寛が形勢今日とも明日とも不知身なれば過去の修因今生の現果拙かりける我かなと所從なれ共耻かしされは肝心を碎きても骨肉を捨てゝも求むべきは菩提薩埵の行血髓を屠り身體を抛

ても。望むべきは安養淨土の境也。徒に身を野外に捨んよりは。同くは覺悟の佛道に捨べし。空く心を苦海に沈めんよりは須く迷津の船筏を儲くべし。而るを身命を雪山に投じゝ半偈の文。眼に宛たれども如不見給仕を千歳に運ひし一乘の説。掌に把るとも似不取。悲哉無上の佛種をはらみながら。無始無終の凡夫たる事を。痛哉二空の滿月を備ながら。生死長夜の迷情たる事を。凡そ此島に放たるゝ初には。思ひに沈みて岩の迫に倒れ臥して。今生の祈も後生の勤もなかりしか共。丹波少將も。康頼入道も。歸洛の後は毎日に法華經一部を暗誦し。よもすがら彌陀念佛を唱へて一筋に後世の爲と廻向して今に怠たらず。夫來迎の金蓮には。貴きも賤きも倶に乘り。弘誓の船筏には。富るも貧をも渡し給と聞ば憑みあり。又妙法の二字には。諸法實相の理を兼。蓮華の兩字には。權實本迹の義を含めり。誠に貴御法也。晝誦み夜唱る功德。去ども後世は覺ゆれば。唯汝も念佛を勸めよ。我も名號を唱へんとて。明れば佛の來迎を待て暮れは

最後の近を悦で。日數をふる程に。次第に弱りて云事も聞えず。息止り眼閉にけり。(源平盛衰記)

○臨終の懺悔(平重衡南都に斬るゝ時)

此に三位の中將の年比の侍に。木工右馬の允知時といふ者あり。八條の女院に見參にて候ひけるが。御最後を見奉らんとて。鞭を打ちてぞ馳せたりける。既に斬り奉らんとしける所に馳せつきて。急ぎ馬より跳びて下り。千萬人の立ち圍ひたる中を押し分け〱。三位の中將の御側近く參りて。知時こそ御最後を見奉らんとて參りて候へと申しければ。中將志の程誠に神妙なり。如何に知時餘りに罪深く覺ゆるに。最後に佛を拜み奉りて斬られればやと思ふはいかにと宣へば。知時易き程の御事候ふとて。守護の武士に申し合せて。其邊近き里より佛を一臺迎へ奉りて參りけり。幸ひ阿彌陀にてぞましましける。河原のいさごの上にすゑ奉り。知時が狩衣の袖のくゝりを解きて。佛の御手にかけ。中將にひかへさせ

奉る。中將これをひかへつゝ、佛に向ひ奉りて申されけるは、傳へ聞く。てうたつが三逆を作り、八萬藏のしやう經を燒き亡し奉りたりしも終には天王如來のきべつに預り、所作の罪業誠に深しといへ共、しやう經にちぐせし逆緣朽ちずして、却りて得道の因となる。今重衡が逆罪を犯すこと、全く愚意の發起にあらず、只世の理を存するはかりなり。生を受くる者誰か王命を蔑如せん。命を保つ者誰か父の命を背かん。彼と申し此といひ、辭するに所なし。理非佛陀の照覽にあり。されば罪報立どころに報い、運命既に今をかぎりとす。後悔千萬悲みても猶あまりあり。但し三寶の境界は、慈悲心を以て心とする故に、濟度の良緣まち〳〵なり。ゆゐゑんげういぎやくそくせじゆむ。この文銘に銘ず。一念彌陀佛卽滅無量罪。願くは逆緣を以て順緣とし、只今の最後の念佛によりて、九ぼん蓮臺に生を遂べしとて、首を延べてぞ討たせらる。日比の惡行はさる事なれども、只今の有樣を見奉るに、數千人の大衆も守護の武士どもゝ、皆鐙の

袖をぞ濡しける。（平家物語）

○臨終の引導　其一（平維盛入水の時）

三位入道三の山の參詣事ゆゑなく被遂ければ、濱宮の王子の御前より、一葉の舟に棹さして萬里の波にぞ浮び給ふ。

三月の末の事なれば、春も既に暮ぬ。海上遙に霞籠、浦路の山も幽也。沖の釣舟の波の底に浮沈を見給ふにも、我身の上とぞ被思ける。歸雁の雲井の餘所に一聲二聲音信を聞き給ひても、故鄕へ言傳せまほしくれほしけり。西に向ひ掌を合せ、念佛高く唱へつゝ、心を澄し給へり。已に水に入り給かと見にけるか、念佛をとゞめて宣けるは、嗚呼今を限とは爭か都に知るへきなれは、風の便の言傳は折節毎にあひまたんずらん。終に隱れあるましければ、世になき者と聞て、いか計か歎き悲まんずらん。思ひ連らるぞや。縦へ水の底に沈む共、などや今は限の文一つなからんと、恨ん事も糸惜かるへし。されは後の世の形見にもなれかしと思へは、最後

の文をかゝばやと思ふ也とて。驄て書給へり。奥に

故郷にいかに松風恨むらん。沈む我身の行へしらずは

とあそばして。武里にたびて後宣けるは。やゝ入道殿。哀人の身に妻子は持まじき者也けり。此世にて物を思のミに非ず。後世菩提までの妨と成事の心憂さよ。親き人にも知らせで。屋島を出てしも。若や都へ忍ひ著て。今一度相見ん事もやと思立ちたりしか共。其事叶ふへくもなし。本三位中將の虜はれて。京都鎌倉耻をさらすだにも心憂に。我さへとられ搦られて。父の頭に血をあやさん事もうたてければ。思切て髮を剃し上は。今更妄念有へし共覺えさりしに。本宮證誠殿の御前にて。終夜後世の事を祈申しに。少き者共の事思出て。我身こそ角成ぬ共。故郷の妻子平安に守り給へと申されき。又未來の昇沈は。最後の一念によると聞けは。一心に念佛申て。九品の蓮臺に生れんと。今を最后の正念と思へは。又思出すぞや。誠や思事を心中に殘すは。妄念とて罪深しと聞は。懺悔する也と語り給へば時賴入道涙を押拭て。尊きも卑きも恩愛の道は繫けるくさりの如くとて。力及ざる事に侍り。されば迷を捨て悟をとる。釋迦如來菩提の道に入らんとて。十九にして城を出て給しに。耶輸陀羅女に遺を惜て出兼給けり。佛猶如斯。況んや。凡夫をや。尤悲むべし。爭不痛中にも夫妻は。一夜の契を結ぶ。既に五百生の宿緣と申せば。此世一の御事にあらず。角思召す尤理なれ共。生者必滅。會者定離は。憂世の習ひなれば縱遲速こそ有とも。後れ先立御別終になくてや侍るべき。いつも同じ事と可被思召。但し第六天の魔王と云外道は。欲界人天を我奴婢と領して。此中の衆生の佛道を行し。生死を離るゝ事を惜み憤りて。樣樣の方便を廻し是を妨く內。或は人と成て菩提の大道を塞き。或は妻と成て愛執の牢獄を不出。去共三世の諸佛は。一切衆生を悉に我御子の樣に思召て。淨土不退の地に勸め入んとし給ふに。妻子と云ふ者生死を繫く紲なるが故に。佛の重く誡め給ふは。卽ち是也。御心よわく不思召。

況んや出家の功德は莫太なれば。先世の罪障悉に亡ひ給らん。謹て諸經の說を案するに。百千歲か間百羅漢を供養するも。一日出家の功德には及はず。縱ひ人ありて七寶の塔を立ん事。高さ三十三天に至るとも。一日出家の功德には猶及ひ難しといへり。又一子出家すれば。七世の父母皆得脫す共明せり。七世猶如此。況んや我身に於てをや。中にも彌陀如來は。十惡五逆をも嫌はず。一念十念をも導き給はんと云悲願御座す。彼願力を憑まん人疑ひやは有へき。二十五の菩薩を引き具し給て。伎樂歌詠し。只今極樂の東門を出來給へし。觀音捧蓮臺。勢至合掌。迎へ給はんずれば。今こそ滄海の底に沈むと思召とも。則紫雲の上にこそ昇り給はんずれ。成佛得脫して神通身に備へ給ひなば。娑婆の故鄕に還て戀しき人をも御覽し。悲しき人をも導き給はん事。いと安かるへしと申ければ。中將入道然るへき善知識にこそと嬉敷て。忽に妄心を飜えて。正念に住し。又念佛高く唱へ給ひ。光明遍照十方世界。念佛衆生攝取不捨。と誦し給ひつゝ。海に

ぞ入り給にける。(源平盛衰記)

○臨終の引導　其二(平宗盛の臨終)

同じき二十三日。近江の國篠原の宿に着き給ふ。昨日までは。父子一つ所にてはしゝかとも。今朝よりは引き分れて。別の所にすゑ奉る。判官情ある人にて。三日路より人を先立てゝ。善知識のためにとて。大原の本性房たんがう(湛豪)と申す聖を。請し下されたり。大臣殿善知識の聖に向ひて宣ひけるは。さても右衛門の督は。いづくに候ふやらん。假令首をこそ刎ねらるゝとも。席は一つ席に伏さんとこそ思ひしに。生きながら別れぬるとこそ悲しけれ。此十七年か間一日片時も離れず。今度西國にて。如何にもなるべかりし身の。生きながら捕はれて。京鎌倉恥を暴すも。偏にあの右衛門の督故なりとて。泣かれければ。聖も哀に思はれけれども。我さへ心弱くては叶はじとや思はれけん。涙押し拭ひ。さらぬ體にもてなし。あはれ高きも賤しきも。恩愛の道は思ひ切られぬとにて候へば。誠にさこそ

は思し召され候ふらめ。生を受けさせ給ひてより以來樂み榮え。昔も類候はぬ一天の君の御外戚として。丞相の位に到らせ給へば。今生の御榮花一事も殘る所ましまさず。今又かゝる御目にあひ給ふ御事も。先世の宿業なれば。世をも人をも。神をも佛をも。怨み思し召すべからず。大梵王宮の深禪定の樂。思へばほどなし。況やでんくわう朝露の下界の命に於てをや。忉利天の億千歳只夢の如し。三十九年を過させ給ひけんも。僅に一時の間なり。誰か嘗めたりし不老不死の藥。誰か保ちたりけん東父西母が命。秦の始皇の驕奢を極め給ひしも。終には驪山の塚にうづもれ。漢の武帝の命を惜み給ひけんも。空しく杜陵の苔に朽ちにき。生あるものは必滅す。釋尊未だ栴檀の烟を免れ給はず。樂盡きて苦來たる。天人猶五すゐの日にあへりとこそ承れ。されば佛は我心自空。罪福無主。觀心無心。法不住法とて。善も惡も空なりと觀ずるが。正しく佛の御心に相叶ふ事にて候ふなり。如何なれば彌陀如來は五こふが間思惟して。起し難き願を發しましますに。如何なる我等なれば。億々萬劫が間生死に輪廻して。寶の山に入りて手を空しくせん事。怨の中の怨。愚なるが中の口惜しきことにては候はずや。今はゆめゆめ餘念を思し召すべからずとて。戒保たせ奉り。頻に念佛を勸め奉れば。大臣殿も然るべき善知識と思し召し。忽に妄念を飜し。西に向ひ手を合せ。高聲念佛志たまふ所に。橘右馬允公長。太刀を引きそばめ。左の方より大臣殿の御後に立ち廻り。既に斬り奉らんとしければ。大臣殿念佛を止めて。右衛門の督も。既にかと宣ひけるこそ哀れなれ。(平家物語)

○死後の引導(關白道長薨去の席に天台座主院源の說法)

淨飯王入滅度のあした悉達太子白がねのひつきをになひ。摩耶夫人眞如にかへり給ひしゆふべ。五百羅漢くれなゐの涙を流しき。不生不滅の佛すら。猶愛別離苦無去無來を離れ給はずなどいひつゝけ給ひて。六道にあひ給はん佛菩薩に申し給ふべきやうなど。一々につゞけ申し給ふ。

この中に十六字あり。諸行無常。是生滅法。生滅々已。寂滅爲樂。その處何の心かあると問はゞ卽ち尊靈答へ給ふべし。諸行無常は天上にのぼる智惠のはしなり。是生滅法は愛欲の河を渡る般若の船なり。生滅々已は劍の山を越ゆる寶車なり。寂滅爲樂は淨土に參る八相成道の義果なり。無量無數の賢衆來りて。この所はいづれの經論の文ぞと問はゞ。答へ給ふべし。諸行無常は增一阿含經の文なり。是生滅法は大般若經の文なり。生滅々已は華嚴經の文なり。寂滅爲樂は後敎涅槃經の文なりと答へ給ふべきなり。この娑婆世界は願ひ住むべき所にもあらず。輪王のくらゐ久しからず。天上のたのしみも五衰早く來り。ないし有頂も輪廻期なし。いはんや世の人をや。事と願と互に。苦と樂とともなり。かるがゆゑに經に曰く。いづる息は入る息を待たず。入る息は出づる息をまたず。唯眼の前にたのしひさり。かなしひ來るのみならず。又命終にのぞんで。罪にしたがひて苦にれつ。尊靈かの西方世界に生れ給ひなば。樂をうけ給はんとき。極もなく人天けふしてあひ見ることをえ給ふ。又かぎりなき樂しひを得給ふべし。かるがゆゑにこの世界につゆも心とまらず。佛の御をしへのごとくにて。最後の御念佛みださせ給はざりつ。たのもしきかな。今は極樂の上品上生の御位と賴み奉るなど。いみじうあはれに悲し。かやうの道の師などは。いみじき御門の君と申せど。唯事のはじめをこそよむめれば。年ごろの御師弟子のちぎりにてはしましつれば。なく〳〵のこりなく無常のさはふをもさるべきことをも。心のかぎり申し給ふ。せん方なくたふとくかなし。諸行無常のじゆをば唯涅槃經の偈とのミこそしたりつれ。多くの事どもゝたり給へりけるものを。うべこそ雪山童子身にもかへけめと聞く人々のみあり。（榮花物語）

○菩提の種（平女院の御留守に後白河法皇其御庵室を御覽せらる）

僅に方丈なる御庵室なるを。一間は佛所に修て身泥佛の三尺の彌陀の三尊。東向きに立たれたり。來迎の儀式と覺えたり。中尊の御手には五色

の糸を懸け。御前の机に淨土の三部經を置かれける。內に觀無量壽經あそばしさしたりと覺しくて。半卷ばかり卷かれたり。傍に一卷の卷物あり。披いて御覽ずれば高倉先帝安德天皇を始め進らせて。太政入道小松大臣屋島以下。一門の卿上雲客。御身近く被召仕ける諸大夫侍に至るまで姓名を書き注されたる過去帳なり。每日に讀み上げ。弔はせ給ふにやと思召ければ。龍顏に露を淨ひて御衣の袖にもかゝりける。佛の左には普賢の繪像を懸け。御前には八軸の法華經を置かれたり。右には善導和尙の御影を懸け奉り。淨土の御疏九帖往生要集を被置たり。北の壁には琴琵琶各一帳立てられたり。管絃歌舞の菩薩の來迎の粧を思召准ふかと覺にたり。又時々の御心慰みにや。古今萬葉集源氏狹衣其外の狂言綺語の物語多く取り散されて。折々の御手すさみ昔の御遺と覽えて哀れなり。御傍の障子の色子形には諸經の要文被書たり。中にも一切業障海皆從妄想生若欲懺悔者端坐思實相と見えたり。昇沈不定の悲み。此に彼に生する歎も。眞如平等の理に迷ひ。妄想顚倒の心より起れり。悔悟の方法によらず。爭か慧日の光に照されんと覺えたり。諸行無常。是生滅法。生滅々已。寂滅爲樂とも被書たり。此文の心は。一切の行は皆無常なり。無常の虎の聲は明々暮々耳に近つけ共。世路の趍に聞ず。雪山の鳥の聲へ日々夜々に今日不死知と鳴け共。栖を出てゝ忘れぬ冥途の使身に競ひ。屠所の羊の足早くして。親に先き立つ子。子に先き立つ親。妻に別かるゝ夫。夫に後くるゝ妻。形は芭蕉の風に破るゝが如く。命は水の泡。波に隨ひて消えぬ。萬法皆しかなれば。諸行無常と置かれたり。若有重業障。無生淨土因。乘彌陀願力。必生安樂國とも被書たり。妄想懺悔も便りなく。寂滅爲樂と覺らねば。彌陀の悲願に濟くはれ。往生安樂憑みありと覺えたり。御腰障子に女院の御手として。

　思ひきや深山の奥にすまひして雲井の月をよそにみんとは（源平盛衰記）

〇菩提の花

無始生死の間にちりの結緣つもりて泰山となる。露の功德たまりて蒼海にたゝへ。善根林をなす機感時をえて。今生を生死の終りとし。當來を解脫のはじめとする人。此ときに生れて此緣にあひたり。故に慈父の長者は貧子どもの爲に福德の經を說て。化一切衆生とこしらへ。みな皆令入佛道とよろこひ。悲母の敎主はよわき子供のために誓願を發して。此願不滿足と舌をのべ。誓不成正覺と口をはく。此に知ぬ此南浮は西方の出門なりといふことを。道心はたとへかたからずとも。懺悔の幣をつかねて常に心を清めん。然ば則ちさくら花えたゝこもり。春の候を迎へて開きなんとす。佛種胸にうづもれ。終のときに臨て宜くきざすべし。(海道記)

〇淨土の樂

實にぞはじめて佛會に入りて。未曾有なる事を見たる。言へば語もたら

ず。思へば心もおよばず。たゞ物ごとに類ひなくめづらしければ。國界あまねくゆかしくて。遙に佛會を伺ひゆくに。聖衆やう〳〵たづさへゐて。かつ〴〵寶林寶樹會に入らしむ。寶をみがきて。七重互ひにいろへたる植樹。ひかりをつらねて立ち並ぶ影。おのがなみ〳〵みだりがましからず。枝には春秋をならべて。花もあり果もあり。葉には衆色を雜へて。あを葉にも似たり。紅葉にも似たり。この寶花寶葉の妙なるだにもあるに。長風やゝ林をつたひて過ぐれば。音樂ほのかに木ずゑを渡りてゆく。こゑ妙法をとく。聞けば無生を證す。又八功德地のほとりにのぞみて。百寶池渠會をみれば。七寶の岸八德の波にあらはれて。いとゞ鮮かにうつろふかげを。おのがいろがほにすみなせる。水の底も隈なく潔きに。青黄赤白の蓮さへ。光を浮へてさきみだれたれば。いとゞ蓮花の大衆も莊嚴をそへて。花に遊ふ人天は九品のすがた新に。波に戲るゝ菩薩は十地のかげたけたり。みぎはに鳧雁鴛鴦群りゐて。妙なる法を鳴きつれたる聲哀婉

雅亮にして殊に人の心を發すたよりなり。此等はみな爲引他方便凡聖類の巧。故佛現示不思議の御しわざなるべし。(三部鈔)

○淨土の悟

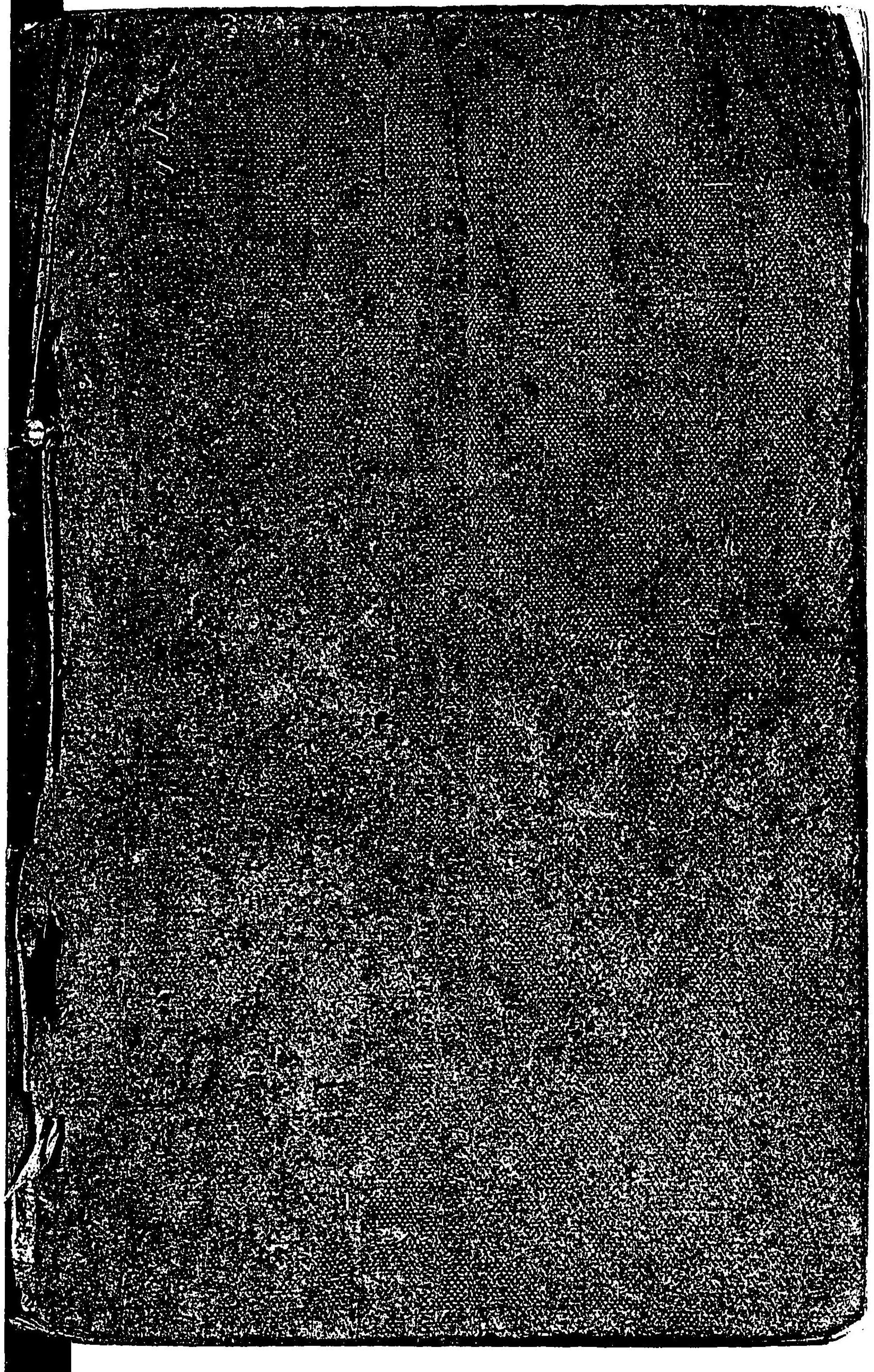
又かく利他ひまなけれども。自利も妨けられず。樂多けれども。道もすたる〻事なし。四種の威儀常見佛。行來進止駕神通。六識縱横自然悟。未籍思量一念功とて。起居に佛を見奉れば見佛の益たへず。ゆくもかへるも神通にのれば。聞法のみちになづまず。俗諦森羅の萬像につきて。眞空妙寂の一理を顯はすに。六識縱横に悟れども。思量一念の功をもからず。さばかり壁觀あなうらをとかず。功夫志をゆるくせざりしかども。縄床むなしくうげて。心地は遂に開けさりしに。いま微塵故業隨智滅。不覺轉入眞如門といふ道の自然なる事。まことに不思議なるをや。(三部鈔)

國文中の佛教文學終

明治三十二年二月十五日印刷
同　年三月廿六日發行
(定價金四十錢)

版權所有

編輯者　織田得能　淺草區松淸町六十二番地
發行所　國語傳習所　神田區三崎町一丁目三番地
右代表者　杉浦鋼太郎
印刷所　三島印刷所　神田區南神保町十番地

賣捌所
京橋區彌左衛門町　東京經濟雜誌社
日本橋區通三丁目　林平次郎
日本橋區本石町三丁目　金昌堂
日本橋區三丁目　丸善
神田雉子町　岡崎書店
東京堂
東海堂　北隆館　中西屋

187
17